

聖書:使徒の働き22章1～21節

説教:そして主を見たのです

はじめに

今年最後の礼拝を迎え、この一年のことを改めてお一人お一人振り返っておられるのではないかと思います。いろいろなことがあって、そのときはわからなかったけれど後から振り返って初めてあ
のとき神さまの助け、支え、励ましたが確かにあったのだと、気付かされることがあります。

今日は22章を見ていますが、21章で何があったのかをすこし見ておきます。パウロが三度目の伝道旅行からエルサレムに戻って間もなく、ユダヤ人たちから「この男は民と律法と宮に逆らうことを教えている」と訴えられ、とうとうエルサレム中が混乱状態になるほどの騒ぎに発展してしまいます。当時、イスラエルの治安警備を担っていたローマ軍は、すぐにパウロを逮捕し、軍司令部に連れて行こうとするのですが、パウロは千人隊長に願って、群衆の前ひとこと弁明させて欲しいと願い出ます。それが今日の箇所に至るいきさつです。

このときパウロは何を語ったのか。そこからどのような神の恵みが見えてくるのか、ともに見てまいります。

1 かつてのパウロ

1) クリスマンを迫害していた

3、4節を読みます。「私は、キリキアのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しく教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。

そしてこの道を迫害し、男でも女でも縛って牢に入れ、死にまでも至らせました。」

パウロがここで語っていることは、ユダヤ教の人たちには歓迎されるような、まことに喜ばしい話です。でもパウロの立場になればどうでしょうか。今彼はクリスマンの伝道者として働いています。普通ならあまり触れて欲しくない、古い傷がうずいてしまうようなできれば隠しておきたい暗い過去です。それなのになぜ語るのか。殺気立つユダヤ人の怒りをすこしでも和らげ、この場から釈放してもらおうという下心なのでしょう。

もちろんパウロはそのような小手先で難を逃れようとする人ではありません。そうではなくて、なにか別の理由がありそうです。それは何かこのあと少しずつ見ていきます。

2) 思いがけなく地に倒れる

続く6、7節。「私が道を進んで、真昼ごろダマスコの近くまで来たとき、突然、天からのまばゆい光が私の周りを照らしました。私は地に倒れ、私に語りかける声を聞きました。『サウロ、サウロ、どうしてわたしを迫害するのか。』」

まばゆい光を受け、まぶしくなって地面にゆっくりと座り込んだ、ということなのかなと、あまり深く考えずなんとなくそんなふうになんか思っていました。でも、自分が自転車で転んで骨折した経験をして、違う見方をするようになりました。

パウロは若きパリサイ派のリーダーとして、着々と実績を重ね、仲間からの信頼も篤く、将来を期待されていました。今度は初めてのダマスコ遠征です。パウロも判断力と知的能力、それに人をまとめいくリーダーシップにだれにも負けられないという自信をもっています。このダマスコ遠征も成功させる自信があります。船でたとえれば、天気晴朗で波は穏やか、目標に順調に向かっている。行く手を邪魔するものは何もない。そう思って何も疑わない。ところが次の瞬間、彼は地面に突き落とされてしまう。

これがどんな状態なのか、皆さん想像できるでしょうか。ラグビーとか野球でも時々ありますが、スポーツ選手が激しくぶつかったり転んだりして身体に思いがけない強い衝撃を受けたときというのは、倒れ込んでしばらく動けなくなります。目がうつろになることもある。意識はあるけれど、自分が何をどうすればいいのか、まともな思考が働かない。これは自分が経験して初めて分かりました。パウロもそんな状態になったのではないかと。それに加えて目も見えません。人生三つの坂があるとありますが、強い自信があればあるほど、「まさか」ということが起きたとき、精神的なショックは非常に大きい。

3) 弱くなったとき

そういうときにパウロは主が自分に語る声を聞くのです。「サウロ、サウロ、どうしてわたしを迫害するのか。」パウロが初めて主に出会った瞬間でした。

それでもこれからどうしたらよいか全く分かりません。とにかく仲間に手を引かれてダマスコま

で連れていってもらいました。これも彼にとってショックだったでしょう。これまで自分の力で人生を切り開いてきた人です。だれかを助けることはあっても、助けられたことがありません。弱い自分、できない自分、人のあわれみを受けなければならない自分、そんなことはまったく考えたこともない。そのような人は、みじめな状態になってしまった現実をすぐには受け入れられません。食事でも喉を通らないほどのどん底に突き落とされていきます

そこへアナニアがやってきます。彼はパウロの目を開けてからこのようなことを告げます。14節「私たちの父祖の神は、あなたをお選びになりました。あなたがみこころを知り、義なる方を見、その方の口から御声を聞くようになるためです。」

アナニアはパウロの身に起こることについて三つのことを述べています。一つは「あなたがみこころを知るようになる。」二つ目は「義なる方を見る。」三つ目は「その方の口から御声を聞くようになる。」

はたしてこの三つはいつどのようにして実現していったのか。

2 変えられるパウロ

1) 「そして主を見たのです」

それは、パウロがエルサレムに戻って宮の中で祈っていたときでした。18節。「そして主を見たのです。主は私にこう語られました。『早く、急いでエルサレムを離れなさい。わたしについてあなたがする証しを、人々は受け入れないから。』」

パウロはこのとき初めて、よみがえられた主の御顔を見たと言っています。主ご自身の御顔を拝しながら、その方の語る声を聞いた。パウロがダマスコで意気消沈して食事でも喉が通らなかったときに、アナニアが語った三つのうち、「義なる方を見る」と「その方の口から御声を聞くようになる」がこのように実現します。

では残りのもう一つはどうなったか。それが21節です。「すると主は私に、『行きなさい。わたしはあなたを遠く異邦人に遣わす』と言われました。」このときパウロは、初めて神のみこころを知らされます。まさか自分がこれから異邦人のところに向いて、福音を語ることになるなど考えたこともなかったでしょう。

2) 自分の罪を告白する

というのは、自分がかつて何をしてきたのか、自分の口で告白したばかりだからです。19, 20節。

「主よ。この私が会堂ごとに、あなたを信じる者たちを牢に入れたり、むちで打ったりしていたのを、彼らは知っています。また、あなたの証人ステパノの血が流されたとき、私自身もその場において、それに賛成し、彼を殺した者たちの上着の番をしていたのです。」

普通ならどうなるでしょうか。たとえあなたが今心を入れ替えて信仰者となったとしても、これだけひどいことをしたのでは、福音を語るのにふさわしくない。そう判断されるでしょう。ところが主は、パウロの告白を聞き、かえって、ふさわしい者だと判断されているようです。

3 キリスト者が罪に定められることはない

1) パウロの確信

改めて思うことは、どうしてパウロは、このように自分の罪を、たとえ相手がユダヤ人であろうが異邦人であろうが、ユダヤ教徒であろうがキリスト者であろうが、包み隠さずまっすぐに語ることができるのだろう、ということです。

パウロの性格が、なにごとにも白黒はつきりさせないと気が済まなかったのか、そういうことよりも、彼の中にもっと別の語るべき動機があるように思います。

先週、北海道KGK(キリスト者学生会)の聖書会宿に招かれ、三日間にわたりメッセージし、学生たちとお交わりをすることができました。奉仕の依頼があったときにあらかじめ、パウロが書いたローマ人の手紙からお願いしますと言われました。語る時間は全部あわせて三時間。限られた時間の中でどのように語るのか祈った末、6章から8章にかけてパウロが何を伝えようとしたのか、そこに焦点を当てることにしました。今日の箇所にも関係があるのでその一部だけご紹介します。

ローマ書7章19節で、彼は「したいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています」と語った後、24節で「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」と正直に自分の弱さを表します。もし、手紙がそこで終わっていたのならどこにも救いがありません。でも彼は続けてこう語るのです。8章1節。「こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」

救われて罪が赦されているのに、肉のからだのうちに罪が住みつき、したくない悪を行ってしまうことを正直に書けるのは、彼には強い確信があるからでした。どんなに罪を犯したとしても、もしそ

の罪をキリストに告白していくならば、私たちは必ず罪の赦しをいただくことができる。

2) 神の愛

パウロはそのことをどのように知ったのでしょうか。主を見たときではないでしょうか。主の御声を聞いたときではなかったか。自分は、キリスト者を迫害し、キリストの証人であったステパノが殺される時にも手を貸した。そんなひどい罪を告白したにもかかわらず、主はそのことをひとことも責めない。かえって「行きなさい。わたしはあなたを遠く異邦人に遣わす」と主のご用のために用いてくださると守ご自身が御心を明らかにしてくださった。主がはっきりと語ってくださった。その姿を見た、その声を聞いた。パウロがこれからしていくことは、いま見聞きしたことをそのまま証ししていくことです。なにか付け足す必要もなければ、なにか割り引く必要もない。主が自分にどのように関わってくださったかをただ語るだけ。

とは言っても、どうしてこのように自分を憎む者たちの叫び声に囲まれても、ぶれずに力強く語ることができるのでしょうか。

その理由をローマ書8章38, 39節で語っています。「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」

パウロは罪を知らされれば知らされるほど、それに比例するように神の愛の深さと豊かさを教えられました。このことがあったので、死が目の前にせまっても彼は前に進むことができました。

この一年も神の愛にとらえられながら歩んできたことを思い起こし、御名をあがめたいと願います。